

言葉一つで授業が変わる

しげえだ いちろう
重枝 一郎

1. 懐かしい記憶

図 1

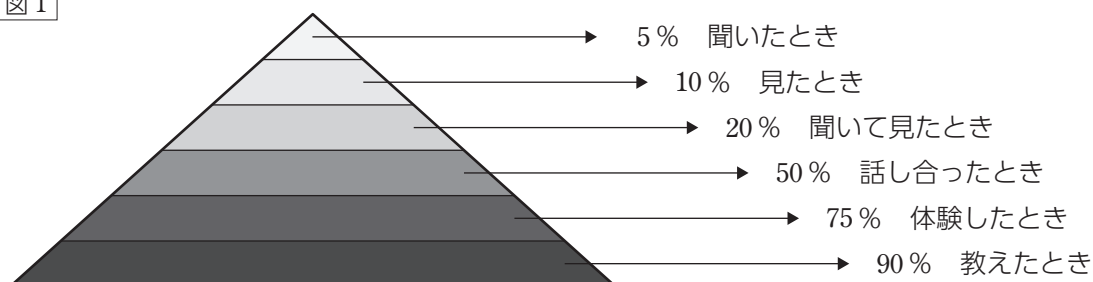


図1は、いわゆる「ラーニングピラミッド」をわかりやすく示したものである。

この「ラーニングピラミッド」を知る前のことになるが、誰一人ともに授業に臨まない生徒指導の困難校の立て直しを依頼された際、似たような図を「学びの記憶」という名称で当時の生徒に示したことを思い出す。その際、実感を伴うことが大切だと思い、板書もしない、ノートもとらせない、ただ私の単調な説明を「聞くだけ（5%を指す）」の授業をした。その時間の教室には「心理的酸素」がない状態で、生徒は（私自身も）ただただ苦しい時間を過ごしたことを覚えている。次の時間は「見るだけ授業（10%を指す）」をした。板書はするが、それをノートにとってはいけない「見るだけ」の授業である。このような授業で「どれだけ学びの記憶として残るか」「学びの記憶を上げるためにはどうすることが効果的か」を考えさせた。生徒からは「ノートに書くのは自分の学びの記憶を上げるため」「話し合うと思考が活性化しているし、眠くならない。結果、記憶にも残っていると思う」等の考えが生まれた。この発言が、生徒の「ラーニングピラミッド」の納得感につながっていると思う。どんな授業も、意欲からの落ちこぼれを生まないように、実感を伴わせながら、経験を手に入れさせたい。

2. 授業の基礎的条件

よい授業を実現するための条件は、図2に示すように「基礎的条件」と「内容的条件」の表裏一体型と言える。「基礎的条件」は、授業の目標や内容、方法についての考え方や形式にほとんど関係なく、すべての授業に常に要求される条件であり、その条件の適否は学習の雰囲気、学習の規律、そして肯定的な人間関係に支えられている。

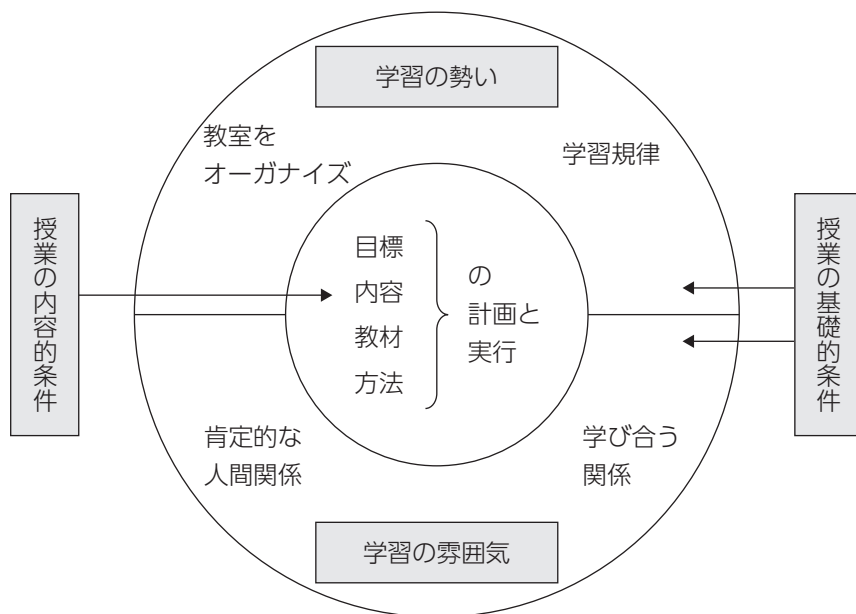
私は、この図2をよく小中連携の会議のときに示していた。私が若い頃の小中連携会議では、小学校の先生は「中学校の先生は授業を丁寧にしていない」と指摘し、それに対して中学校の先生は「生徒指導ができていなければ授業は成立しない」「小学校の先生はもっと生徒指導を

きちんとしておいてほしい」と反論するようなやり取りがあった。

その際、この図2でそれぞれの校種の「授業」についての捉えの違いを説明した。

中学校は円の内側（内容的条件）を授業と捉え、外側（基礎的条件）を生徒指導と捉えている。それは、授業は個で、生徒指導はチームでという感覚から、2つを分けて考えるからだと思われる。一方で、小学校はこの円全部を授業と捉える。生徒指導は授業づくりの中に含まれている。そして、担任が個で行っている感覚が強いと思われる。小学校の先生は生徒指導をきちんとしていないわけではもちろんない。ただ小学校でも、組織的な生徒指導体制づくりについては、必要性を強く感じている。それぞれが連携するためにはお互いを知ることが大切である。

図2



さて、「授業の基礎的条件」における「学習の雰囲気」では、肯定的な人間関係づくり、学び合う関係づくりが、学力向上に波及する。その関係性の質を高める際、まず「コミュニケーションは質より量である」というところから始め、授業での振り返り活動において「認め合い」の機会を必ず入れていくことが第1のステップになる。その中での双方向のコミュニケーションにおいて、学習内容の「意味面」を伝え合うだけでなく、「教えてもらってうれしかった」「違う考えを聞けて楽しかった」等の「感情面」の交流も大切になる。

このような考え方を私は、「成長はたし算」というフレーズで浸透させている。もっと言うと「人はたし算」「人生はたし算」である。この「たし算」マインドは、生徒を成長させる。誰でも新しい自分をつくることができる。特に、新しい人や新しい学習との出会いには、必ず自身の新しい面が顔を出す。それも同質よりも異質の方が出やすかったりする。違う考えの「異質のたし算」の影響は結構大きい。これは、キャリア教育のマインドづくりやいじめ防止（自分と考えが違う人の足を引っ張らない）にもなる。このように相互作用、波及効果があるので、私は「生徒指導総合」という言い方を好む。私がする講演のほとんどは「生徒指導総合」という意識で、学力向上、キャリア教育、人間関係づくり、生徒指導、部活動指導などすべてを関

連付けて話す。ちなみに、「たし算されやすい人」というのは、受け入れる力と、人から好かれる力が必要になる。「では、好かれる人って？」という問いを生徒に投げかけることから、学習・生活・対人のルールやマナーにつなげたり、人間関係力の向上を図る意識につなげたりできる。まさに「生徒指導総合」ということである。

話を「感情面」の振り返りに戻すが、「あなたが大切だ」という価値あるメッセージを他者から繰り返し受け取ることが意欲を生み出し、もっと言えば、生きる力をもたらす。たった一言「ありがとう」と感謝されたり、「がんばっているね」と認めてもらったりするだけで『自己有用感』が高まっていく。まずは「価値あるメッセージの送り手になれているか」という問いかけを生徒に対して常に発信することが大切になる。そして、そのアウトプットの場合は、一日の大半を占める授業ということになり、その積み上げ的な経験が、言葉によるコミュニケーション能力を鍛えることになる。

この「学習の雰囲気」づくりのポイントとして、教師が同じ空間で全員に向かって授業をする場合は、「このクラスで一緒に学ぶという空気づくり」をしているという意識が大切であり、その集団に対して、「このメンバーで学び合うと必ず学力が向上する」といった期待を発信することで効果につなげることができる（ピグマリオン効果）。また、生徒同士の学び合いにおいて、小グループやペア活動を行う場合は、「価値あるメッセージの送り手」になるという目標をもたせると、学力向上や互いの自己有用感を高めたり、役目意識を育てたりする効果が期待できる。つまり授業では、認知能力と非認知能力を一体的に育てるという意識がよい。そのため、授業では、認知の目標（教科の目標）と非認知の目標（主体的に学ぼう・協働的に学ぼうを、抽象度を低くした言葉で表す）を、同等に本時の目標として生徒と共有するのが肝要になる。

また、「授業の基礎的条件」における「学習の勢い」においては、図で示したように、「学習規律」と「教室環境」が波及効果になる。このことは「3」で述べる。

3. 「学習の勢い」は、コーチングで契約する

授業は生徒指導の弱点でもあり、また最大のチャンスでもある。教科指導から学級の荒れが始まり、逆に、教科指導を通して学級づくりが大きく前進する。一日の大半を占める授業において、ルールや人間関係をつくるのが最も効果的であり、学力向上だけでなく波及効果が得られる。

「学習の勢い」は、維持ルールと向上ルールをコーチングで契約することが大切である。図2で示したように「学習の勢い」は、学習規律と教室環境を整えることが大切である。

学習規律については、まず、維持ルールの確立が必要である。維持ルールとは、集団でお互い気持ちよく学習するために必要なルール・マナーのことである。ただ、維持ルールの定着だけで、ただだらと取り組むことは危険である。集団は必ず退行していく。そこで大切なのは、よりよい集団になるために工夫・改善していくことである。この刺激がないと生徒は考えない集団になったり、一部の生徒が都合よく楽しむ集団になったりしていく。こうならないために、向上ルールを考えさせて実行させ、振り返らせ、また考えさせることが大切になる。

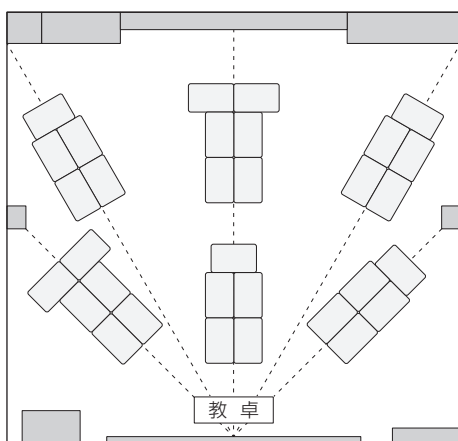
例えば、『「べき」のすり合わせ』というやり方では、「この教室でみんなが学ぶ、学び合うためにはどうあるべきか？」という問いで、まず、個の考えをつくらせ、それを小集団でまとめさせ、全体で共有する。教科の問題解決的な学習においても同じようなプロセスで行うので、筋の通った実践になる。みんなで作った契約なので、違反したら、私は思い切り叱ることができ、そして遵守していたら思い切りほめ、認められ感を高めていくことができる。このルール違反と遵守は、2本のアンテナで同じようにしっかりキャッチしていくことが大切になる。往々にして、教師は違反だけに反応している場合がある。ルール遵守の姿をほめ、それが学習のリリースンづくりにつながることを理解させると、学習のルールが強化されていく。

次に、教室環境の話をする。私はサッカー部を長年指導してきたが、例えば、でこぼこで石も落ちているような狭いグラウンドでのサッカーを体験させたり、そのような状況について考えさせたりする。この状況で意欲的に取り組むことはなかなかできない。ところが、芝にラインの入った広いグラウンドに連れて行くと、がんばれと言わなくても勝手に意欲的に取り組む。だからどの部活動でも環境を整える。環境と意欲はくっついていて、教室環境は学習意欲につながる。これも「生徒指導総合」ということになる。

教室のオーガナイズは、私たちが生徒の成長に対して何を求めているかで決まる。例えば、今の教室の、縦横に机が並んだ風景を見て違和感をおぼえる人はいるだろうか？ほとんどの人は何も思わないと思う。日本の学校の教室風景は約70年間変わっていない。しかし、世界は2000年を過ぎた頃から変わっている。求めるものが違うと変化が生まれる。日本で、依然として「知識の量」と「過去の経験」を重視していた頃、世界では、それでは未来の出来事を解決できないと判断し、創造性を養うための教育にシフトチェンジした。それに伴って教室も机をグループ化して立ち歩きも当たり前の風景となった。

図3は、古い話になるが、1999年度から2009年度現場最後の年までの私の教室環境の実践になる。この形を全校的に取り入れていた。図3のように班を作って集団づくり、人間関係づくり、そこから波及する学力向上に取り組んだ。形だけでは集団づくりにはならないので、日常のすべての教育活動はこの班活動を基盤とした。効果を上げるために、特活や道徳の時間はグループワークTRを導入した。ちなみに列のカタチにするのは定期テストの時間だけである。

図3



この形態は、「机の向きに角度をつけているから、顔を少し動かすだけで黒板に正対できる」「6人班の時に、全員がお互いの顔を見て話をするができる」という特長がある。テーマは「友だちの考えや行動を参考にしよう」「友だちの目から見た自分に気づこう」「友だちと自分の行動、考え方、感情の違いの比較から、新しい気づきをしよう」であった。このように教室をオーガナイズすることや、学習・生活・対人のルールメイキングはもちろん生徒と決める。テストのスコア向上、不登校の大幅減等、数値的な結果も得た。

4. 初頭効果でやりたいこと

年度初めに、初頭効果を狙って、教師にしてほしいことを2つ述べる。

① 自分の授業の売り

「自分の授業の売りはこれだ！」を最初に整理して、生徒に打ち出してほしい。自分の授業を受けて学習していくとどんなメリットがあるかを、はっきり打ち出してほしい。その有言実行力は、授業の信頼度を高める。生徒の主体性も引き出されやすくなる。

② 自分の授業のトリセツ

自分の授業のトリセツを具体的に語ってほしい。学習ルールと、学び合う関係であるリレーションは相互作用がある。気をつけてほしいのは、そのトリセツの運用である。自分がその運用ができないと、教師の指示の重みがなくなる。運用できるトリセツ、またはルールを簡潔に生徒に伝えてほしい。

学校の理念は「人づくり」である。生徒たちがどのような道を選び、どのような形で社会に貢献していくか、「人づくり」の理念に直結するよう、同僚と一体感をもって取り組んでいく。

私は、年度初めの初頭効果として必ず「アサーショントレーニング」を行っていた。最初の語りだけ紹介して、本稿を終わることにする。

『テーマは「言葉一つでクラスが変わる」です。今日の授業の目標は、「アサーティブな人になろう」です。「アサーティブ」とは、自分も相手も大切にする言葉を発することです。この時間は、「アサーティブ」になるための、「アサーショントレーニング」の時間です。みんな、自分の言動が、「自分よしなのか、相手よしなのか、みんなよしなのか」を想像して、行動することを学習します。

さて、「言葉一つで…」ということですが、例えば、「はい、これ宿題ね」って言われたら、「エ～めんどくさいよ～」っていう感情になる。でも、「今日、焼肉ね」って言われたら、「イエーイやったー！」っていう感情になる。つまり、言葉一つで感情が変わる。「ありがとう」って言われたら、うれしい気分になるけれど、汚い言葉を言われたら、嫌な気分になる。言葉と感情ってくっついていてことなのです。いい言葉をどれだけ使うかってとても大事なのです。だから、みんなにまずやってほしいのは、言葉が大切という考えをもつことです。私は、「言葉って、お金のかからないオシャレ」って思っています。プラスのオシャレな言葉を増やすだけで、クラスはよくなります。これが楽しい学校をつくる、学ぶ環境をつくる秘訣なんです。でもこれだけでは、足りません。本当に楽しい学校をつくりたいと思うなら、人に優しくなろう。人に優しくありたいと思うなら、「相手がしてほしいことって何だろう？」って想像することが大事になります。「こうしたら相手は喜ぶんじゃないかな」「こんな言葉をかけられたらいいな」って考えているその時間が、優しさを身に付ける練習時間になります。そして誰かにアサーティブに声をかけてみよう。想像しているだけだと、あなたの「心」の中だから誰にも見えないけど、その「心」を表出する「心遣い」は見える。そしてその「優しい心」はちゃんと伝わります。』

(福岡女学院中学校高等学校 校長)